

医師となって30年あまり、消化器外科医として数多くのがん患者の皆さんの治療にかかわってきました。しかし、自分自身の経験はなく、「これでいいのか?」「患者や家族の皆さんにとって良かったのだろうか?」など自問する場面も少なくありませんでした。さらに「もっと本音で話し合いたい」と考えても、実現していませんでした。忙しいということ以上に、「治療をする立場」と「受ける立場」という違いが立ちはだかっていたのだと思います。

今、なぜそう思うようになったのか。それは昨年3月、自分自身に進行胃がんが見つかったからです。

外来の診療中に気分が悪くなりトイレに行ったところ下血を認めました。「まさか」と頭が真っ白、軽いショック状態に。すぐ胃の内視鏡検査を受けたところ、胃の上部に進行がんが見

患者の立場で現実知る

体験語り合う場作りしたい

西村 元一

金沢赤十字病院副院長

ドクター元ちゃん
がんになる



一望月亮一撮影

つかりました。その後の検査で肝臓への転移が分かりました。「治療をしなければ余命半年」という知識はありますが、へと変わりました。がんの告知

を受けるとき妻がつぶやいた「患者さんには、いいお医者さんだったかもしれないけれど、自分自身に対してはあつ医者やったね」という言葉は、胸に突き刺さりました。

それから見える風景は全く異なるものになりました。抗がん剤治療や手術を受けると、医師や看護師ら、病院のスタッフからの説明やアドバイスだけでは解決できないようなことが多い

にしろら・げんいち 1958年金沢市生まれ。83年金沢大医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者や医療者が集うグループ「がんとむきあう会」代表。

のです。たとえば、抗がん剤治療後の食事の苦痛。おいしかったものが、味覚障害のためおいしくなくなります。単に味付けを濃くすればいいわけではなく、かなりつらい気持ちになります。抗がん剤による脱毛はよく知られ、私が治療した多くの患者の方も経験していました。私は治療前に短く散髪しましたが、実際に髪が抜け始めると、外見の問題だけではなく、抜けた髪の毛の処理が面倒だと分かりました。女性の場合は、もっとひどいのだろうと思います。

自分自身が病気になる前、診察室で説明していた「通りいっぺん」の内容に含まれていないことばかりで、「今まで自分は何をしていたのだろう」と、が

くせんとなりました。さらに、患者の立場になると、がん体験者や家族の声、そして医療者の本音に、がんと生きるヒントがあると気付きました。医療だけで解決できないお金や家族、生活のこと考える必要があり、病状を考えるとできるだけ要領よく解決していきたい。そのためには「体験者の話をいろいろ聞きたい」と思いましたが、そのような場所は多くありません。

私は、がんが見つかって、1年余りになります。現在、ある程度治療が軌道に乗って小康状態が得られ、それほど長くはないと思われる残りの人生で、がんを患った医師の私が何をすべきかを考える余裕も少しできました。その一つがこのように自分の自身の経験を記すことであり、もう一つは上記したような場作りです。

次回は5月15日掲載